

中国植林協力の現場では (4) カウンターパート人間模様

【「問題になったら責任を負う」】

国外での事業の成否は、かなりの程度にカウンターパートしだい。私たちも最初はこの問題で苦労したが、のちにはほんとに恵まれたと思う。

スタート当時のカウンターパートは大同市青年連合会で、実体は共産主義青年団大同市委員会。共産党と政府の登竜門で、たしかに優秀な青年が多かった。問題は農村を知らないことと人事異動が頻繁なこと。数か月おいて訪れると、担当者が交替し、引き継ぎもされていなかった。

1994年春から担当したのが共産主義青年団の祁学峰副書記で、私といっしょにいったのが彼の農村初体験。その奥の村が3年つづきの早魃で食べるものにも事欠いていると聞きこんだ。行ってみたかったが、地元の幹部がいい顔をしない。

祁学峰が説得にあたり、OKがでたのは夕刻だった。薄闇のなかを小雪がちらつき、あばら家が不規則に並ぶその村はいっそう貧しくみえた。一軒の農家をのぞくと、5~6歳の男の子と祖父母が夕食中だった。若夫婦は出稼ぎで不在。洗面器の底にアワの薄い粥がわずかにあり、ほかにはトウガラシ味噌の古びたビンだけ。収穫した食糧は底をつき、政府からの救済食糧のトウモロコシが麻袋に2つ。秋の収穫まで、それで食いつなぐという。

私がビデオを回そうとすると、郷の幹部が止めにはいった。くるだけでも問題なのに、撮影までさせるわけにはいかないと。間髪をいれずに祁学峰が「問題になったら自分が責任を負う」と一言。それで私は撮影を許された。(この村は広霊県苑西庄村で、その後、井戸を掘るのに協力したりして、もっとも親しい村のひとつになった)

【協力事業専門の事務所をつくる】

こんな幹部はどここの国でも多くない。なんとか引き止めたいと考え、この協力事業を専門にあつかう部署の設置と、責任者に彼が就任することを私は求めた。それが緑色地球ネットワーク大同事務所、数か月後に市政府に承認され公務員の配置もきまった。それ

からも失敗や問題は発生したが、全体としていい方向に動き出した。

日中の緑化協力を支援する「小淵基金」ができたあと、中国側の会議で意見を求められた祁学峰は、自分たちの教訓を4点にまとめたそうだ。

1) 自分の本当の気持ちで誠実につき合わないといけない。形式的なつきあいでは相互の理解が深まらない。誠実につきあうことは協力全体の基礎である。

2) バランスをとる。協力の双方は車の両輪の関係である。立場はちがうから、自分の主張はすべきである。しかし最後には相手の立場を理解し、バランスをとる必要がある。いい関係をつくるカギはバランスにある。

3) 仕事はまじめにすべきで、いいかげんではない。これは態度の問題である。

4) 苦勞を厭わず、農村の現場に行く必要がある。机の上、紙の上だけで仕事をしてはいけない。これは精神の問題である。

その場で急に求められて、これだけの発言をしたそうだが、その内容は私自身が努力してきたことでもあった。祁学峰はいま大同市の中心部・城区の区長である。

【個性的なメンバーが集まる】

祁学峰が探してきた2代目の所長・武春珍は女性で、口八丁手八丁のやり手。市長をはじめ上部との交渉にはもってこいの人物で、疲れを知らないで何時間でも自分の主張をつづける。「能説」(話せる)というのは中国ではだいじな才能である。男だったら嫌われるだろうが、最後にニコッと笑って「謝謝!」といえ、それで通ってしまう。

その逆に農民は話し下手が多く、自分の思いを表現できない。彼らの気持ちをくみ取り、ちゃんとやれるか、私は不安だった。日本のボランティアがグループに分かれて農家で昼食をとり、定刻を過ぎても集まらなかったとき、村の幹部に厳しくあたった。私が「農村は時間の観念がちがうから、しかた

がないよ」となだめても、「高見はまちがいを擁護するのか」とかみついてきた。

あの前向きの性格がいい。なにか失敗しても、自分で気づくことができる。こういうタイプの人間が、全責任が自分にあることを自覚すると、急速に伸びる。

経済の発展とともに、以前のおおらかさが大同でも失われている。私たちの事業も専門化・複雑化してきたので、困難も多い。「以前はいいことはやりやすかったが、いまはいいこともやりにくい」とこぼしながら、それでもがんばっている。

副所長の魏生学は地味でおとなしい男だ。どこに長所があるか長いあいだ私はわからなかった。ところが彼は人望があり、多くの人から信頼されている。なかでも彼には盟約による（半ばは冗談のようだが）6人の義兄弟がおり、実の家族以上に親身に助けあう。その義兄弟たちがじつにいいポジションにいて、私たちのプロジェクトを助けてくれるのだ。

この活動をはじめたとき、私が話せた中国語はいくつかのあいさつ言葉だけで、その後も進歩がみられない。困りぬいた祁学峰が通訳としてつれてきたのが王萍。彼女も農村は初めてで、灰色に濁った村の湧き水をみては、「高見さん、こんな水を飲んでもだいじょうぶですか?」。村の子と自分の娘とをくらべて、「この子はどうして小さいんですか?」。そのたびに私は「王萍! そんなことを私に聞くな! あんたのしごととはなんなのだ」。

そう、彼女は大同市第4人民病院の看護婦で、日本の埼玉医大で1年間研修の経験があり、その経歴をかわれたのだった。その後5年も日本語をつかう機会がなく、すっかり忘れていたが、彼女はたいへんな努力家。日本語を教えるために日本の退職教員が大同にきた幸運もあって、日本の専門家から「植物のことは王萍の通訳がいちばん安心」といわれるまでに進歩した。その後、職場でも看護婦長、院長助理をへて、いまでは従業員680人の大病院の副院長。忙しくなりすぎたのが私にとって困ること。

ついでに書くと、農村の見聞を同僚の看護婦や医者に彼女が話しても、信じてもらえなかったそう。都市の人にとって、農村はそれくらい遠い。

運転手の郭宝青は大のくるま好き。いま乗っているのは2004年8月購入で、30万キロ近く走っている



写真 協力事業の仲間たち (1999年)。祁学峰 (後列右4)、武春珍 (前列右4)、王萍 (前列右2)、魏生学 (後列右5)。

るのに、新車のようにピカピカ。擦ったことすら1度もない。メーカーの日本人が最近それを見て、「こんなふうに乗っていただけるとうれいすねえ」といって感激していた。

大同市内は急に自動車が増えたが、交通秩序はそれに追いつかない。人、自転車、バイク、自動車がひしめき、急に人が跳びだすのもしょっちゅう。すかさず小郭は「中国人不怕死!」(中国人は死を恐れない)。私の運転なら何人ひき殺したかわからない。この運転手に求められるのは、技術、判断力にプラスして度胸と図々しさ。小郭は以前、石炭輸送の大型トレーラーを運転しており、その4つとも備えている。

彼はまた機械ものをなんでも器用にこなす。新たに果樹園をつくったときは50日間泊り込んで、日立建機から寄付されたパワーショベルを運転し、植え穴を掘った。カメラやビデオの腕もかなりのもの。

私たちの活動場所は山や丘陵の僻地が多く、道が悪くて、行くのもたいへん。渋滞その他で夜遅くなることもしばしばで、いちばん疲れるはずなのに、いやな顔ひとつみせたことがない。

こうやって書いてみて、ほんとに恵まれていると改めて思う。

((特活) 緑の地球ネットワーク 高見邦雄)